

# 幼小連携における「接続期」の創造と展開

横井 紘子\*

幼小連携の取り組みが近年さかんであり、そのキーワードの1つに「接続」という言葉がある。「接続」は、「幼児教育と小学校教育を滑らかにつなぐ」という意味合いで用いられ、幼小連携においては、幼稚園・小学校双方の「カリキュラムをつなぐ」ことが「接続」の最終的な目標とされる。「接続」を中心に据えた数ある取り組みの中で、お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校の実践研究は、「接続期」という時期を新たに設け、幼稚園年長後半から小学校1年の夏休み前までの「接続期」カリキュラムを構築した点で大きな意義がある。ここから、「接続期」という言葉が新たに幼小連携の議論や実践において頻繁に用いられるようになった。しかし、「接続期」という言葉が一般化する一方、「カリキュラムをつなぐ」という本来的な「接続期」の意味が希薄化している事態も否めない。「接続期」の本来的な意味を失わないよう、その在り方を絶えず捉え直していく必要があるのではないか。

## 1. 幼小連携のキーワードとしての「接続」

近年、「小1プロブレム」、「学びの連続性」等の様々な問題関心から、幼稚園・保育園と小学校の連携、いわゆる「幼小連携」の必要性がさかんに論じられている。平成10年(1998)6月に中央教育審議会に取りまとめられた答申、「新しい時代を拓く心を育てるために」においても、「幼稚園・保育所の教育・保育と小学校教育との連携を工夫しよう」という節が設けられ、「幼稚園・保育所から小学校への接続が円滑に行われるようにするため、情報提供の充実や教育内容のいっそうの連携が求められる」と明記されている。さらに、平成13年(2001)2月における報告「幼児教育の充実に向けて～幼児教育振興プログラム(仮称)の策定に向けて」では、「具体的に実施すべき施策とその目標」として、「幼稚園と小学校の連携の推進」が掲げられ、子どもが幼稚園・保育所から小学校へと移行する際に、校種の段差を乗り越え、滑らかな接続が必要であるという視点から、「幼稚園と小学校が連携し、幼児期にふさわしい主体的な遊びを中心とした総合的な指導から、児童期にふさわしい学習等への指導を円滑にし、一貫した流れを形成することが重要」とされている。その翌月に策定された「幼児教育振興プログラム」においては、「基本的考え方」として、「幼稚園教育と小

学校教育との間で円滑な移行や接続を図る観点に立って、幼稚園と小学校の連携を推進する」ことが掲げられた。以上のような中央教育審議会を中心とした行政からの答申・報告を受け、全国の自治体においても、幼小連携の重要性が認識されるようになり、その取り組みがより一層推進されている。

また、文部科学省は平成11年(1999)より、研究開発校の新しいテーマとして「幼稚園と小学校の連携を視野に入れた教育課程の研究」を取り上げ、指定校による研究開発が行われた。(研究開発校における幼小連携を主題とした研究は平成18年度現在継続されている。)さらに、平成14年(2002)には「幼・小連携に関する総合的調査研究」、平成15年(2003)には「就学前教育と小学校との連携に関する総合的調査研究」が研究事業として銘打たれ、研究地域が指定され、全国の研究協力園・学校において幼小連携をテーマとした研究が行われている。

文部科学省主導の研究開発校・研究指定地域における幼小連携についての実践研究が取り組まれる中、幼小連携事業は各自治体の教育行政においても重要課題として位置づけられるようになり、幼小連携が中心課題に据えられた各自治体独自の取り組みもさまざまに展開されている(横井・酒井、2005)。

幼小連携の取り組みとしては、「まず、幼児・児童の交流からはじまり、次に、教員同士の研修やティー

キーワード：幼小連携、接続期、カリキュラム、移行期

\* お茶の水女子大学大学院人間文化研究科

ム・ティーチング、人事交流が行われ、最後に教育課程が編成されるという流れ」(中央教育審議会初等中等教育分科会幼児教育部会、2004)がある。文部科学省の幼児教育課調査研究事業である平成14年(2002)の「幼・小連携に関する総合的調査研究」では、研究の趣旨として、「幼稚園から小学校への教育が滑らかに移行できるよう、幼稚園・小学校教員の円滑・適切な連携、幼児と児童との『交流』など、幼稚園と小学校の連携・『交流』を図る体制を構築する」(鍵括弧筆者)ことが掲げられている。同研究事業である「就学前教育と小学校との連携に関する総合的調査研究」(平成15年)においては、「幼児期から小学校段階に移行する際、子どもの成長・発達に連続しているにもかかわらず、幼児期の教育と小学校以降の教育との間に必要以上の段差や相互理解の不足が見られるのが現状である。本事業では、幼児期の教育と小学校以降の教育との適切な『接続』の在り方を探る」(鍵括弧筆者)として、研究事業の趣旨が説明されている。「幼児教育から小学校教育への円滑な移行」を目的とする幼小連携の具体的な取り組みは、「交流」と「接続」がキーワードとなっていることがわかる。

現状の幼小連携の取り組みとしては、「交流」活動は従来より比較的さかんに行われてきたが、「教育課程をつなぐ」という意味での「接続」の活動は理念的なものにとどまっており、具体的方策の提示は数少ない(横井・酒井、2005)。それは、「交流」と言うと、幼児と児童との合同活動等、具体的な取り組み内容がイメージしやすく、実践にも移しやすいが、「接続」と言った場合には、果たして何と何をつなぐことになるのか、「教育課程をつなぐ」とは具体的にどのような活動になるのか、実践の具体的内容・活動が見えにくいこともあるだろう。しかし、幼小連携において目指されるものが幼児教育から小学校教育への「滑らかな接続」・「円滑な接続」とされている以上、「交流」といった枠のみではなく、幼稚園・小学校のカリキュラムをつなぐこと、つまり、「接続」にまで視野を広げる必要がある。

平成17年(2005)1月に提出された答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」では、幼小連携の第一義的目的は、「遊びを通して学ぶ幼児期の教育活動から教科学習が中心の小学校以降の教育活動への円滑な移行」にあるとされている。そのために、「幼児教育と小学校教育との連携・接続の強化・改善」が目指され、「子どもの発達や学びの連続性を確保する観点から、連携・接続を通じた

幼児教育と小学校教育双方の質の向上」が図られることになる。また、具体的方策として、「幼児教育における教育内容、指導方法等の改善等を通じて生きる力の基礎となる幼児教育の成果を小学校教育に効果的に取り入れる方策」が挙げられている。この答申においても、「接続」の重要性が明確に指摘されている。「接続」という言葉は、今や幼小連携を語る上では外せないキーワードとして存在しているのである。

## 2. 「接続」という言葉が示すもの

「接続」という言葉は、「接続を円滑に」と平成10年度(1998)答申にも記されているように、「滑らかな接続」「円滑な接続」等と、「滑らかな」「円滑な」といった修飾語と共に用いられることが多い。しかし、「滑らかな移行」「円滑な移行」というように、同様の修飾語と共に、「接続」ではなく「移行」という言葉が用いられることも頻繁にある。「移行」という言葉も、幼小連携において重要なタームである。

ここで、まず「接続」と「移行」の違いについて確認しておく必要があるだろう。「接続」という言葉の辞書的意味は、「つなぐこと・つながること・続けること・続くこと」(広辞苑第5版)である。それに対して、「移行」は「(制度などが)うつりゆくこと」である。

このことからわかるように、幼児教育から小学校教育への「移行」と言った場合には、幼児教育というカリキュラムから、別のカリキュラムである小学校教育に、その「段差」を越えて「うつる」といったイメージになる。単に「移行」と言った場合には、幼稚園と小学校の間にカリキュラムのつながりはなく、両者間には大きな「段差」があることを示す。対して、幼児教育と小学校教育の「接続」と言った場合には、文字通り幼児教育と小学校教育が「つながる」、または「続く」といったイメージになる。「接続」と言った場合には、幼児教育と小学校教育のカリキュラムの一部がつながり、「移行」の場合よりも「段差」が多少なりとも低く抑えられることになる(図1)。

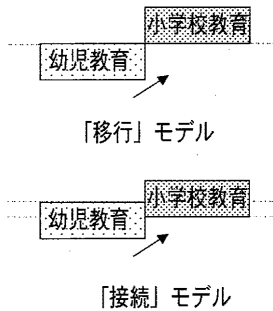


図1：「移行」と「接続」のイメージ

さらに、「滑らかな」「円滑な」といった修飾語がつけられた場合には、幼児教育と小学校教育のカリキュラムの間にある「段差」をより低くすること・なくすことが目指される。よって、「滑らかな移行」と言った場合にも、「滑らかな接続」と言った場合にも、幼稚園・小学校双方のカリキュラムが歩みより、カリキュラムの接続面をより広くすることが求められる(図2)。カリキュラムの接続面、つまり、「つながる」部分が大きくなればなるほど、従来あった大きな段差はより低いものになっていくのであり、「滑らかな接続」が実現されることになる。必要以上の段差を解消し、「滑らかな移行」を目指す上では、カリキュラムの「接続」が必要条件であり、平成17年(2005)答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について—子どもの最善の利益のために幼児教育を考える—」でも述べられているように、「遊びを通して学ぶ幼児期の教育活動から教科学習が中心の小学校以降の教育活動への円滑な移行」のためには、「幼児教育と小学校教育との連携・接続の強化・改善」を考えていく必要があるのである。

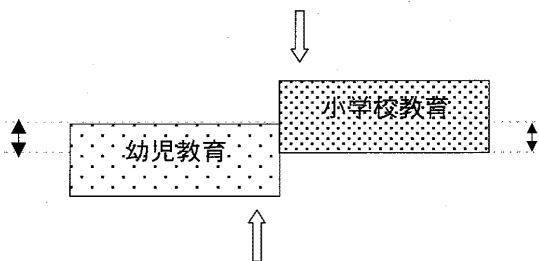


図2：「滑らかな移行」と「滑らかな接続」のイメージ

しかし、「接続」の理想的在り方は以上のように提

示されるものの、どのように段差を低くすればよいのか、実際にカリキュラムをどうつなげればよいのか等、実践における具体的方策は見えにくい。「滑らかな接続」が実現される幼小連携の取り組みはいかなるものであるのかについて、以下の節で検討していく。

### 3. 「接続」への取り組み

「接続」の実践としては、どのような取り組みが行われているのか。ここでは、ひとまず、お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校以外で実施された文部科学省の研究開発指定校の取り組みをいくつか検討してみたい。

#### 1) 東京都中央区立有馬幼稚園・小学校(研究開発指定は幼稚園のみ：平成11年度～平成13年度)

教育課程の研究開発を受けたのは幼稚園のみであり、小学校は現行の教育課程を維持。「接続」するには、特別の教育課程を組まなくとも、「教師がつなぐ目」を持つことが連携につながることを示している。イベント型交流が中心のこれまでの実践から脱し、くらし・文化・社会という視点から、幼児教育と小学校教育の学びのつながりを捉え、プロジェクト型の交流を計画し、年間カリキュラムに組み込んだ。

#### 2) 滋賀大学教育学部附属幼稚園・小学校・中学校・養護学校(平成12年度～平成14年度)

「学び」でつなぐことを念頭に置き、「接続」と「共生」を重視した一体的な教育課程の研究開発が目指された。「学び」支える視点として、①表現②思考③情報・コミュニケーション④ヒューマンライフという4つの柱から子どもの姿を整理し、幼一小一中の12年間の学びの連続性を重視したカリキュラムを編成した。

#### 3) 鳴門教育大学学校教育学部附属幼稚園・附属小学校(研究開発指定は幼稚園のみ：平成13年度～平成15年度)

幼稚園における遊びを小学校以降の教科の窓口から整理し、子どもの学びの連続性が確かめられた。附属小学校は独自の「段階的分化型カリキュラム」を作成し、1年生の学習を「生活学習」として位置づけている。「生活学習」とは教科の枠を取り外した学習であり、活動や体験を多く取り入れることから、幼稚園の自由で生き生きとした姿が消えてしまわない活動を展開しながら、1年生で学ぶべき内容を身に付けられるよう

にしている。また、幼・小の合同保育／授業という実践を通して、小学校の教科を主体とした学習を、幼稚園における豊かな経験を生かした学びへと変換することを模索している。

以上3つの幼小連携における「接続」の実践における共通点として、「学びの連続性」「学びをつなぐ」という視点から、既存の幼稚園・小学校のカリキュラムを捉えなおしていることがあげられる。新しいカリキュラムを構築するというよりは、幼稚園と小学校で行われている既存のカリキュラムをある共通の視点から捉えなおすことによって、これまで隠されていた、潜在的な「学びの連続性」というものを可視化する試みであると言える。それは、例えば、「一見、同じように見える古いものを新しい目、見方でみていくこと、つないでいくことによって意味づけていくことが大切なのではないでしょうか。」(秋田, 2002)という言葉からも理解できる。以上のように、既存のカリキュラムをこれまでとは異なった視点から捉え直すことにより、全く別のものとして考えられていた幼稚園と小学校のカリキュラムが、実際にはさまざまな点においてつながっていることが明らかにされた。

さらに、幼稚園と小学校の現行のカリキュラムを「接続」という視点から整理し、新たに意味づけした上で、単元・カリキュラム開発が行われた。

有馬幼稚園・小学校では、「学びをつなぐ」という視点が教師同士の間で相互理解され、年間計画に組み込まれたプロジェクト型の交流活動が行われた。しかし、単元としての交流活動であり、教育課程そのものの編成までには至っていない。滋賀大学附属幼稚園・小学校・中学校では、「学び」をつなぐことを基幹とし、その視点から12年間のカリキュラムを編成したが、「学びの連続性」という視点の導入により「接続」が大きく意識されたものの、既存のカリキュラムの内容自体が大幅に改編されたわけではないと言える。鳴門教育大学附属幼稚園・小学校は合同保育／授業が実践され、さらに、1年生に「生活学習」というカリキュラムが設けられ、幼稚園で培われた「生活的な学び」の中で教科の内容を学ぶ実践が行われた。教科の枠が取り払われ、幼稚園的な学びが重視される「生活学習」という新たなカリキュラムが編成された点では、小学校の既存のカリキュラムの枠を超えていると言える。しかし、幼稚園の教育課程全体と小学校の教育課程全体の「接続」という点では、まだ開発の余地があるだろう。

#### 4. 幼小連携で目指される

##### 「接続」カリキュラムとは

以上のいずれの取り組みも、それぞれに新たなものであり、大きな意義があると言える。しかし、「接続」の捉えとしては、教師の眼から幼児教育と小学校教育を「つなぐこと」に力点が置かれており、子どもの経験として、生活が「続くこと」という視点からは、具体的なカリキュラムの編成には至っていないように思われる。また、めざされる「接続」のあり方として、「滑らかな接続」「円滑な接続」を考えるならば、幼児教育と小学校教育双方のカリキュラム全体が接続されることが望ましい。しかし、有馬幼稚園・小学校と、鳴門教育大学附属幼稚園・小学校における実践において「接続」されたものは、幼稚園のカリキュラムと小学校のカリキュラムの一部分にすぎない。滋賀大学附属幼稚園・小学校・中学校によって編成されたカリキュラムは、教師の視点によって、学びの軸をいくつか浮き上がらせ、その軸を中心として校種間に「接続」の糸ははりめぐらされたものの、「接続」の強度はそれほど強くないように思われる。

また、「接続」のカリキュラムを考える上では、従来の幼稚園・小学校のカリキュラムとの関係性も明確にするべきであろう。そもそも、幼小連携の必要性が叫ばれるようになったのは、従来の幼稚園・小学校のカリキュラムのあり方そのものへの批判からではない。「幼児期から小学校段階に移行する際、子どもの成長・発達に連続しているにもかかわらず、幼児期の教育と小学校以降の教育との間に必要以上の段差や相互理解の不足」という現状の打破が必要であるとされたからである。平成17年度(2005)の答申にもあったように、幼小連携の目的は、「遊びを通して学ぶ幼児期の教育活動から教科学習が中心の小学校以降の教育活動への円滑な移行」であり、従来の幼児期の教育活動と小学校の教育活動そのものではなく、幼児期の教育から小学校以降の教育に移行するまでの「あいだ」の教育活動が問題とされているのである。よって、幼稚園・小学校の現行のカリキュラムにおいて大切に考えられていることはそのままに、その間にある「段差」を「接続」させ、子どもが幼稚園教育から小学校教育へと円滑に移行できるような、「あいだ」のカリキュラム編成が必要ではないだろうか。

## 5. お茶の水女子大学附属幼稚園・ 小学校による「接続期」カリキュラム

お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校は、平成13年度～平成15年度までの3年間、研究開発校の指定を受け、「関わりあって学ぶ力を育成する教育内容・方法の開発研究」を行った。

お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校の取り組みにおける大きな特徴は、幼稚園と小学校を滑らかにつなぐために、新たに「接続期」を設けて、従来の幼児教育と小学校教育の中間型の指導を行う「接続期」カリキュラムを編成し、教育課程全体の「接続」を試みたことである。小学校のカリキュラムのみを幼稚園的学びに寄り添わせるのでも、幼稚園のカリキュラムのみを小学校の先取的形式にするのでもなく、「接続期」という新たに構築された枠の基で幼・小双方のカリキュラムの編成が行われたのである。

本実践では、「接続期」を幼稚園年長後期から1年生1学期までと捉え、幼稚園教育から小学校教育へと円滑に移行するための「あいだ」の時期が明確に設定された。さらに、子どもの実態を考え、「接続期」を「接続前期」（5歳児10月から3月）、「接続中期」（1年生入学からゴールデンウィーク前）、「接続後期」（ゴールデンウィーク明け～7月）に区分したことから、具体的な子どもの姿・教師の関わりを想定しやすくなり、「接続期」のそれぞれの子どもの姿に合ったカリキュラム内容を編成することが可能となった。そして、「接続期」のそれぞれの時期における保育・学習分野が整理・構成され、カリキュラムとして、「接続期の保育・学習分野の学びの概要」が作成された。

具体的には、例えば、1年生入学からゴールデンウィーク前までの「接続中期」における「教室の生活・学習環境の工夫」の取り組みとして、幼稚園の「お帰り」の時間に子どもたちが集まって経験を共有し合う際の空間構成を意識し、教室の黒板前を広くあけて、子どもたちが半円になって集まれる場を設けた。朝の会などに子どもがその空間に集まり、教師や仲間と体験を共有し合ったり、共に前日までの生活を振り返りながら今日の予定を確認し合ったりする活動が行われた。「接続期」を設け、さらにそれを三期に分けたことにより、従来の幼稚園・小学校の二項対立的なカリキュラムでは実現しえなかった大胆なカリキュラム編成が可能となった。特にこの「接続中期」においては、従来の小学校教育の空間・時間の枠を超えた実践が行われ、幼稚園生活から小学校生活へと変化する際の子

どもの経験そのものの「接続」が重視された。その結果、教育課程全体の「接続」が可能となったのである（図3）。

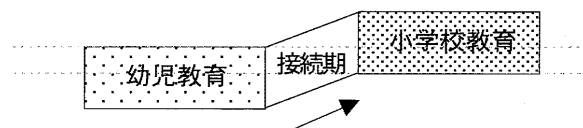


図3：お茶の水女子大学附属幼少における  
「接続期」カリキュラム

## 6. 「接続期」概念の誕生

お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校が「接続期」を提唱したことの大きな意義として、幼児教育と小学校教育を「接続」という視点から、ある特定の時期を「接続期」として明確に浮かび上がらせたことがあげられる。これまで、「小学校への入学準備」「小学校生活に慣れる時期」等として、双方によってぼんやりと意識されていたにすぎなかった時期が、「接続期」という言葉の誕生によって、両者を「接続」という意識のもと、はっきりと輪郭とねらいをもった時期として現れるようになった。

ここで、「移行期」と「接続期」の2つの言葉に注意しておく必要がある。すでに「移行」と「接続」の違いについては述べたが、われわれが幼稚園のある時期から小学校のある時期のことを「移行期」と呼ぶか「接続期」と呼ぶかによっても、その時期の捉えは大きく異なる。「接続」という概念がそれほど重要視されていなかった時代においては、幼稚園から小学校へ「移行」する時期のことを、文字通り、「移行期」と呼んでいた。「接続」がとりわけ意識されていなかった時代においても、年長の後半から小学校1年生のある時期までは、幼稚園・小学校関係者にとって、「子どもが幼稚園生活から小学校生活に移る重要な時期」としてある一定の意味を持って存在していたことは確かであろう。しかし、その期間は具体的に設定されていたわけではなく、子どもが幼稚園生活から小学校生活に「移行」していく時間の流れの中で、明確な形を持った図として浮かび上がっていたわけではない。また、「移行期」とは、幼稚園での生活から、「段差」を超えて、小学校での生活や学習に適応するまでの時期であり、間にある「段差」を滑らかにすることが目指される「幼稚園と小学校の接続」といった意味は直接的には持つ

ていなかったと言える。

このような「移行期」の概念に対して、お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校における「接続期」は、幼稚園年長の10月から小学校1年生の1学期までと、その時期の輪郭を明確にした。同時に、幼児教育と小学校教育の教育課程全体を「接続」という強い意識のもと、「接続期」にふさわしいカリキュラムが編成され、「円滑な接続」の実現が目指された。お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校の研究開発によって、平成17年の答申においても示された、「遊びを通して学ぶ幼児期の教育活動から教科学習が中心の小学校以降の教育活動への円滑な移行」の時期として、「接続期」という新たな時期とカリキュラムが誕生したのである。

## 7. 「接続期」の広がり

このようなお茶の水女子大学附属幼稚園・小学校における「接続期」開発後、「接続期」という言葉がいたるところで頻繁に用いられるようになってきた。

平成15年度～平成17年度に文部科学省から研究開発指定を受けた新潟大学教育人間科学部附属幼稚園・長岡小学校では、幼稚園と小学校の学校文化の違いによる段差を埋める中間ステップとして「幼・小接続期」を設け、科学教育推進の幼小中連携カリキュラムの一環として、幼稚園年長児11月から小学校1年生7月までの期間に「幼・小接続期『かがく』」のカリキュラムを編成している。

同様に、平成17年度～平成19年度の研究開発指定校の奈良県大和郡山市立治道小学校・治道幼稚園では、研究開発課題として、「幼稚園・小学校接続期における系統性を重視した教育課程の編成と指導方法・指導体制の工夫・改善」が掲げられており、幼稚園・小学校9年間で2年間の「プライマリーコース」(3・4歳児)、3年間の「ジュニアコース」(5歳児・小学校1・2年生)、4年間の「シニアコース」(小学校3年生～小学校6年生)に分け、「幼小の接続期である『ジュニアコース』を中心に新たな教育課程の編成について研究する」と概要を示している。

東京都新宿区四谷第三幼稚園と四谷第三小学校では、「接続期の教育として、幼稚園側では協同的な学びを、また、小学校側では、生活科を各にした合科総合的な活動としての『わくわくドキドキタイム』を重要な柱に位置づけ実践」(初等教育資料平成18年2月号p.20)を行った。幼稚園五歳後半を幼稚園側の「接

続期」とし、小学校の学習や生活につながる力を獲得させる「協同的な学び」のカリキュラムが編成された。また、1年生の一学期を小学校側の「接続期」として捉え、のべ20時間程度、「わくわくドキドキタイム」という、生活科と他の教科や領域とをダイナミックに連携させたカリキュラムを設定した。

また、各校園における取り組みにとどまらず、各自治体や研究会、教育関連雑誌等においても、「接続期」が注目され、大きく取り上げられるようになった。

例えば、佐賀市の平成17年5月の「教育長だより」は『「接続期の教育」の創造を』というテーマであり、その中で、『「接続期の教育」を細かくとらえて研究している学校・お茶の水女子大学附属小学校を簡単に紹介したいと思います』と、お茶の水女子大学附属の実践を丁寧に紹介している。実際、佐賀市では17年度から幼稚園・保育園と小学校を連携させるプログラムに着手し、年長と小学1年の「接続期プログラム」を作成し、市内の各園に配布している。東京都教育委員会においても、平成17年度から小学校への円滑な接続を図る就学前教育の推進事業を実施しており、「幼稚園、保育所と小学校の接続期カリキュラムを構築するための研究をすすめている」(東京都議会、平成17年10月20日、会議録、東京都議会文教委員会速記録第14号)と報告している。

平成16年度の全国国公立幼稚園長会主催の園長研修会では、分科会で「幼小接続期の教育について」というテーマが取り上げられ、当時お茶の水女子大学附属幼稚園園長であった牧野カツコが提案者として参加し、お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校における「接続期」の取り組みを紹介している。平成17年度の第56回全国国公立幼稚園長会総会・研究大会においても、大会の趣旨として、「発達の連続性に立って、小学校との接続期の教育の在り方について、実践研究を深めることが課題の一つとしてあげられている。また、この全国国公立幼稚園長会が刊行している『幼稚園じほう』2006年1月号では「接続期の学びー幼児教育と小学校教育ー」として特集が組まれた。

この『幼稚園じほう』の特集において、本節でも「接続期」の取り組みを紹介した、新潟大学教育人間科学部附属幼稚園の副園長であった相馬重輔は、「私が接続期という言葉を知ったのは五年ほど前のことです。全国の附属学校園の研究大会で聞いたのが初めてです。文部科学省の教育課程開発学校・幼稚園が使っていたと記憶しています」(相馬、2006)、と述べているが、ここで相馬が触れている「文部科学省の教育課程開発

学校・幼稚園」とは、まさしくお茶の水女子大学附属幼稚園・小学校を指していると思われる。

## 8. 「接続期」の曖昧化

以上のように、幼小連携の取り組みにおける「接続期」という言葉は、お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校を発信源として(注)、今や全国のあらゆる場所へと広がっている。「接続期」という言葉は、もはや特別なものではなく、幼小連携を語る上での基本タームとして定着しつつあると言っても過言ではないだろう。しかし、「接続期」という言葉が、一つの既成の言葉として、幼小連携を語るさまざまな議論・実践の場において使用されるようになるということは、同時に、「接続期」という言葉が、とりわけ特別な意味を持たない日常的なありふれた言葉に変容していくことでもある。そのことによって、「接続期」という言葉の本来の意味が希薄になってしまい、結果として、「接続期」という時期の意義やそこで目指されるべき教育といったことについて表面的な理解しかされなくなるという危険性がある。

秋田喜代美が、先にあげた『幼稚園じほう』の「接続期」特集号において、「五歳後半の時期を、接続期前期として、保育の質のさらなる深まりを検討すること、小1初めの時期や低学年を接続後期として、両者の接続期を、活動内容、活動集団の組織の仕方、環境設定、教師のかかわりなどを幼小両者の教師が意識してみることが大事」(秋田、2006)と述べていることから、年長の後半から小学校1年生のある時期までが「接続期」の期間として一般的に浸透しているようである。しかし、すでに指摘したように、年長の後半から小学校1年生のある時期は、従来「移行期」と呼ばれていた期間と重なるものであり、単に「幼児期から児童期への移行期間」として「接続期」という言葉が使われてしまう危険性がある。「接続期」は「移行期」と同義ではない。その時期の子どもの生活や学びが「接

続」されていること、つまり、カリキュラムのレベルにおいて、幼児教育と小学校教育が「接続」しているという内実を伴ってはじめて、「接続期」は「接続期」たりえるのである。

確かに、「接続期」という言葉の広まりによって、幼児期から児童期への移行期間に、「接続」という視点が加わったことに対しては、一定の評価をすることができる。しかし、単に「接続」という視点を加えただけでは、「接続期」は理想のままで終わってしまい、幼小連携における「接続」活動は、結局理念的なものにとどまってしまうであろう。このような「接続期」の空回り状態を避けるためにも、今後も、幼稚園と小学校双方のカリキュラムレベルでの「接続」を伴った、新たな「接続期」の開発研究・実践が継続発展していくことが望まれる。お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校における「接続期」カリキュラムに「接続期」の端緒を見出すことができるが、お茶の水女子大学の附属校園においても、「接続期」は規定され、固定された時期やカリキュラムではなく、実践を通して「接続期」のよりよい在り方、新しい視点が模索され続けている。そのような取り組みによって、「接続期」という言葉は生きた意味を持ち続けることができるのであり、絶えず繰り返し捉え直すことによって、子どもにとってよりよい「接続期」が模索され続け、その実現が達成されるのではないだろうか。

## 引用・参考文献・資料

- 中央教育審議会. 『新しい時代を拓く心を育てるために一次世代を育てる心を失う危機—(答申)』. 1998.6.30.
- 幼児教育の振興に関する調査研究協力者会合. 『幼児教育の充実に向けて—幼児教育振興プログラム(仮称)の策定に向けて—(報告)』. 2001.2.2.
- 文部科学大臣決定. 『幼児教育振興プログラム』. 2001.3.29.

注 丸山美和子は、その著『幼児期から学童期へ 接続期の生きる力と知力を育てる』において、「就学前にどんな力をつけていけば豊かな学童期を迎えることができるか」という問いのもとに「教科学習に入るまでの『接続期』の発達課題を具体的に明確にしなければならない」(鍵括弧筆者)とし、「学習につながっていく力」と「生活面での力」の2つの視点から、学童期を見通して幼児が就学するまでに獲得すべき力を示している。すでに1998年(平成10年)において、「接続期」という言葉を用いているものの、丸山の目的は幼小連携にあるわけではない。「幼児が小学校に上がる際のおとなの不安を少しでも小さくすること」を目的にしており、「子どもは、早くから教えさえすれば確かな学力が身につくというものではない」といった早期教育に対する批判を前提とし、いわゆる早期教育に偏るのではなく、子どもの生きる力を育てるといった観点から「小学校入学までに、一人ひとりの子どもにどのような力を育てておけばよいのか」を考察している。「幼児期から学童期への接続」としても、発達心理学的知見からの、個のレベルでの発達課題の検討が中心であり、幼小連携における幼児教育と小学校教育の「接続」の理念とは異なったものであると言える。また、就学前の時期を漠然と「接続期」と呼んでいるが、「接続期」がいつであり、どのような時期であるか具体的な説明はされていない。

- 初等中等教育局長決裁. 幼児教育課調査研究事業. 『幼・小連携に関する総合的調査研究実施要項』. 2002.2.14.
- 初等中等教育局長決裁. 幼児教育課調査研究事業. 『就学前教育と小学校の連携に関する総合的調査研究実施要項』. 2003.3.28.
- 横井紘子・酒井朗. 「都道府県・政令指定都市教育委員会調査の報告」お茶の水女子大学子ども発達研究センター『幼児教育と小学校教育をつなぐー幼小連携の現状と課題ー』. 2005.
- 中央教育審議会初等中等教育分科会幼児教育部会. 第14回 議事録・配布資料. 「幼児教育と小学校教育との連携・接続について」. 2004.5.31.
- 中央教育審議会. 『子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方についてー子どもの最善の利益のために幼児教育を考えるー(答申)』. 2005.1.28.
- お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校. 東洋館出版社. 『子どもの学びをつなぐー幼稚園・小学校の教師で作った接続期カリキュラムー』. 2006.
- 有馬幼稚園・小学校・秋田喜代美. 小学館. 『幼小連携のカリキュラムづくりと実践事例』. 2002.
- 滋賀大学教育学部附属幼稚園. 明治図書. 『学びをつなぐー幼小連携からみえてきた幼稚園の学び』. 2004.
- 佐々木宏子. 鳴門教育大学学校教育学部附属幼稚園. チャイルド本社. 『なめらかな幼小の連携教育ーその実践とモデルカリキュラム』. 2004.
- 中村恵子・佐藤茂幸. 「幼・小接続期『かがく』の研究: 幼・小接続期『かがく』新潟大学教育人間科学部『創造的な知性を培う』. 2005.
- 中央教育審議会初等中等教育分科会. 教育課程部会. 幼稚園教育専門部会(第2回) 議事録・配布資料. 資料4. 『研究開発学校における幼小連携の取組の例(平成17年度)』.
- 東京都新宿区立四谷第三小学校・幼稚園. 和田信行. 「幼稚園の協同的な学びから小学校の接続期の指導へ」. 『初等教育資料』. 平成18年2月号. 2006.
- 佐賀市:市民情報. <http://www.city.saga.lg.jp/>. 「『接続期の教育』の創造を」. 『教育長だより』. 2005.
- 佐賀市教育委員会. 幼保小の接続を考える会. 『幼稚園・保育園から小学校へ. 接続期の教育. えがお. 幼稚園・保育園編』. 2006.
- 佐賀市教育委員会. 幼保小の接続を考える会. 『幼稚園・保育園から小学校へ. 接続期の教育. わくわく. 小
- 学校編』. 2006.
- 全国国公立幼稚園長会. <http://www.kokkoyo.com/index2.html>.
- 相馬重輔. 「接続期について考える」. 全国国公立幼稚園長会. 『幼稚園じほう』. 2006.
- 秋田喜代美. 「接続期の遊びと学び」. 全国国公立幼稚園長会. 『幼稚園じほう』. 2006.
- 丸山美和子. フォーラム・A. 『幼児期から学童期へー接続期の生きる力と知力を育てる』. 1998.
- 丸山美和子. かもがわ出版. 『小学校までにつけておきたい力と学童期への見通し』. 2005.